

Title	ジョン・イートン著『核時代における社会主義』； ブライアン・サイモン編著『マルクス主義の挑戦』
Sub Title	J. Eaton : Socialism in the nuclear age ; B. Simon (ed.) : The challenge of Marxism
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.7 (1964. 7) ,p.97- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19640715-0097">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19640715-0097</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

John Eaton :

Socialism in the Nuclear Age

London, Lawrence & Wishart, 1961, 191 pp.

Brian Simon (ed.):

The Challenge of Marxism

London, Lawrence & Wishart, 1963, 206 pp.

ジョン・イートン著

『核時代における社会主義』

ブライアン・サイモン編著

『マルクス主義の挑戦』

ジョン・イートンの『核時代における社会主義』とブライアン・サイモン編著の『マルクス主義の挑戦』を読めば、イギリスに限らず、正統と言いか純粹マルクス主義者たちの心情をよく窺うことができる。悪と不正とが渦巻いているかに思える現実政治に長恨詩を奏でつつ、敢えて政治的《異端者》として生きることはまことに美しい。このような生き方によつてこそ、マルクス主義者たちの精神的純粋性が保持され得るからであらう。しかも、かれらもまた人間

紹介と批評

的タイプであれば、まさに手負いの野獣さながらの、凄惨な形相が浮べられている。かれらの思想と行動は美德を生むが、その倨傲さの底に不寛容な残酷をひそめ、力みかけた悪態には妙なニヒリズムをすら感じさせられる。こんな皮肉な言い方は、マルクス主義者の激怒をかおうが。

マルクス主義者は、二十世紀資本主義が十九世紀のレッセ・フェールに内在していたアナキーとは急激に変化した事実を認めている。イートンもこれを新しい段階としているが、それは独占資本主義への段階移行なのであつて、かれの認識フレームはマルクス主義的に限定されている。かれの問題焦点は、おのずと現代資本主義論争に絞られ、依然としてそれと対決したままで終つている。経営者革命など、経営者階層を見かけだけ無力化させたことにすぎない。銀行、生命保険あるいは投資信託、それらはみな制度的な株主による独占支配体制の隠蔽であつて、金融寡頭支配、生産手段の私有ならびに商品交換—市場・利潤追求といった経済構造は、原理的に、前世紀の資本主義と変らない。《混合》経済についてはどうか。イギリスに限つて言えば、確かに国家の経済的機能が増大し、生産手段の社会化ないし公有化が経験的現実となつている。にもかかわらず、国家の積極的干渉は、主として運輸、石炭、電気、ガス等、そのほか供給産業と海外投資にとどまり、全生産高の五分の一、残余はすべて私企業、そこでは少数独占資本家のための政策が決定的なのである。と。イートンの書はこういう議論でうめ尽くされている。つぎに、イートンの言葉を引いておく。……部分的变化は社会

の全面的性質を変化させることができず、だが同時にそれは、社会の質における全面的変化との関連において見なければならぬと認識される。かかる変化のための機会が何時到来するかを予測はできないが、それにしても各々の具体的状況において、いくつか可能な行動方向のうち《大変化》の方向にむかい、未来の変化を準備するにいずれが最善かを決定することは可能である。 (pp. 31-32)。

読めば分るが、マルクス主義独有な表現で、これを平易に訳すことはできない。ここにいう括弧つき大変化とは、社会主義社会を意味し、当面の運動は《平和のための闘争》であるという。言葉自体としては日常的だが、これまたマルクス主義者だけに、常識化した平和政策を意味していることは言うまでもない。平和がイギリス国民の大衆感情を煽動できるばかりでなく、平和が解決されなければ、戦争の絶滅的破壊そのものによつて、社会主義のペースペクティブを未来へ投射することができない。したがつて、イートンが核時代における社会主義を平和と結びつけざるを得ないと帰結することは正しい。

また他の箇所では、「第一のことは、自由に生きるための機会——それは各人が如何に生きるかを選択する最大限の自由を各人に許すような方法において、リアリストリックに社会的に生きることのみを目的とする——を創造することである」(p. 126)と言われる。敢えてこれに反対する異端者がどこにようか。しかしながら、イートンはこのように言いながらも、なんらの留保も条件もなく、体制・反体制、資本家階級・労働者階級、はては敵・味方関係へと人

間・社会を分断し、分裂化させてゆく。ここには改良も修正も背信である。いずれが因循姑息であるのか、いまマルクス主義に対するアンティテーゼやアンティパシーを投げつけたところで、なんら実効的な解決を見出すことはできそうにない。ただし、現実の矛盾対立をどの程度、あたえられたセッティングのなかで政治的に解決可能か、さまざまな現実に近い可能性を現実化してゆき、その結果生ずるであろう変化を十分に評価すること、こういつた課題に直面する人間精神の方がどれ程嚴肅であるか、またある時は死を刻む程に真剣であるか、を附言しておくにとどめる。

右と同様のことが、『マルクス主義の挑戦』者たちについても言い得よう。「現代のブレイカメント」を咏嘆するサイモンの冒頭論文は、イートンの書をも含め、明細なデータ、統計数字を使用して、帝国主義的構造変化を説明している。この見るに忍び難い現状は、イギリス労働党および修正主義者の犯罪行為であるかの如く咎め立てられる。階級闘争の欠如、国家の中立的機関の詐偽、漸進的議会制の否定、マルクス主義者として常踏の批判がつづいていく。ついで、イギリス共産党指導者として名高いジョン・ゴーランは、「デモクラシーと階級闘争」において、一方における政治権力の拡散化と他方での経済権力の独占集中化とのパラレルな矛盾を鋭く突き、それに代置すべく労働者階級の統一行動、議会内外での大衆行動を呼びかける。当面の政治闘争綱領として、(一)平和共存を基礎とする独立自主外交、(二)NATOの核戦略の解消、(三)巨大独占資本の国有化、(四)軍事支出の削減、(五)労働賃金の増加、が提言されて

いる。何処も同じであるが、政治の舞台では、どれだけの行動範囲と選択肢が許容されるかがまさに問題とならう。ゴーランは、権力獲得の手段として、イギリスの場合は選挙によるほか路のないことを自認しているようである。

J・R・キャンパベルの「現代マルクス主義とその現代的適用」は、論題の示す通り、マルクス・レーニン主義の二十世紀における実践的テストに重点を置いている。ロシア革命の成功自体が、工業化の進化↓プロレタリアートの大量出現↓社会主義革命という歴史的运动法則の逆作用を証明したと同時に、マルクス・レーニン主義に分派の危機を生ぜしめている現在、キャンパベルの問題は深刻に反省されねばならない。マルクス主義者自身にふりかかった問題なのであるから。結局かれは、第二次大戦後のいわゆる《福祉国家》とか《人民資本主義》は国家独占資本主義であつて、現代の問題状況こそレーニンの帝国主義であるという主張に問題が移され、マルクス・レーニン主義の理論的な正しさを崩してはいない。そして、闘争という文字が並べられる。資本主義相互間の闘争、労働者の資本家に対する闘争、ファシズムの反動的独裁との闘争、植民地とメトロポリスとの闘争、社会主義諸国の出現と対資本主義諸国との闘争、あらゆる政治的、経済的、イデオロギー的敵対関係を同時に終熄せしめる唯一の方法——それは、トータルな計画化による経済構造の変革だけである、と。さりげない確信である。

このような特有の優越性は、A・L・モートンの「芸術と人民」およびE・V・ロウセルの「科学と進歩」にも一層度ぎつくあらわ

## 紹介と批評

されている。「自由とは選択する権利のことである。然り、だが自由は正しく選択することから生ずるものである。芸術家は、他の人びとと同じく、かれらの自由がマルクス主義の解放的真理と、その現実化のための闘争にあるということを、いまや認識しなくなろうと信ずることはできない」(p. 140)。「現代におけるマルクス主義の挑戦は、それが自然科学内部においてすでに適用された科学的分析方法を、人間社会の発展をも含めて、あらゆる現象に拡大された、全体包括的科学理論であるという事実に向うている」(p. 127)。この種の議論は、誇らしげに雄弁なトトロジョーとして涯しなくつづけられる。そこには、より多く信ずる者は、信じない者よりやはり強い、ということだけが残されているかの如くである。影もなければ惑いもない無限の報賞に対して、芸術家・自然科学者はどう答えるか。

最後に、A・ケットルの「共産主義と知識人」という論文について触れよう。これ位蒸し返されて、豊かなる貧困の議論に終つているテーマも少なからう。ケットルはまず、一九六〇年八月三十日、テレビ・インタビューでB・ラッセル卿が現代世界の動向に対し見解を求められた時の対話を引き合いに出す。十五分のうち十二分間をさいて、ラッセルは二十世紀の展望をオーウェルの逆ユートピアとして描き、人間の自由の無い、官僚と科学者の支配する味気無さを嘆いた、という。このペシニズムが、ラッセルをして政治的実践の場においては、核戦争に対する阻止運動に向わせ、ソヴェト軍縮提案を絶賛させ、共産主義者に寄りそわせている。にもかかわら

ず、当のラッセルは共產主義社会を自由のアンティテーゼとして心象化し、恐怖の対象としているのは何故か。ケツトルは、このところに自由主義的知識人の典型を見るのである。かれの論理は冷酷に、現代知識人の優柔不断を追討つ。

資本主義社会内部で、知識人は相対的に権力を喪失し、プチ・ブル的な擬態的《独立性》を保っている。ケツトルによれば、かれらが資本主義を許容しつつ、それに批判的たらざるを得ない悪あがきこそ嘲笑されるべきである。それを、ヒューマニズムという弁明を、ケツトルは糾問する。「西ヨーロッパに関しては、前世紀中頃までは、社会主義というユートピア概念が、人間意識の発展に有力な助けとなる役割を果たしてきた」と明確に言うことができる。だが、社会主義秩序をたんに欲するということに対して、社会主義革命を現実に実践し得るものとして一階級が立ちあらわれるや、その時から、科学的可能性に対立しユートピア的理想のポーズを取ることには、エンゲルスも記しているように、退嬰的となる。ましてや、ポーズと反対ポーズの取り方がヒューマニズム原理の名のもとになされるとすれば、それに劣らず退嬰的となるのである」(p. 190)と。

一体、真のヒューマニズムとは何か。マルクス主義者の解答はあまりにも明白である。ケツトルは、かつて神が誤りを犯し、犯した罪を悲しんで離れ去つた知識人の怯懦を痛烈に非難する。そして、マルクス主義へのコミットメントを、共産党へのコミットメントを強調する。かれは明瞭に、共產主義者たることなくマルクス主義者であり得ない、と述べている。ただマルクス主義的に思考する知識人

には、寸鉄を刺されたような思いではなからうか。

もはや多くを語る必要はない。「朽ち果てたものを見る」ということと、それをどのように正しく立てるかを知らぬことは異つた事柄である」(p. 191)とケツトルは言う。まさに正しい指摘である。だが、問題は言葉ではなく、やはりイデオロギーの見方に帰着する。イデオロギーというものは、分厚い現実についてのわれわれの無知の部分を充たしてくれる限り有効であるが、同時にそれ自身の無知をつねに意識するだけの余裕が無いと、かえつて空虚なものとなる。その空虚なものを出来るだけ充たしてゆくことが、知識人の知識人としての役割であろう。これはきわめて単純な事実であつて、知識人がそれを知らないはずは無いであろう。

(奈良和重)